

父が亡くなってから、49日間は怒涛の日々だったと母は言う。父の遺体を引き取るため、母はわざわざルワンダまで足を運ばなければいけなかった。六月のルワンダはうだるような暑さで、母は遺体が腐敗する可能性を何よりも懸念していた。私はその間、祖母の家に預けられていた。「ゆうこさん帰ってくるの、来週の水曜日だって。学校には連絡しておいたから。ゆっくりしていいよ。」祖母はそう言って食卓についた。テーブルの上には、二つの焼き鮭と小松菜の漬物、湯気が上った味噌汁と玄米。鮭はあまり味がしなかった。私たちは父のことについて、何も話さなかった。何も話せなかった。私たちの間には、薄いガラスの膜があるようだった。触れたら音を立てて破裂しそうな、繊細な何か。祖母は置時計をじっと見つめていたが、私が祖母を見ていることに気づくと、祖母はへらっと、口角を無理やりあげて笑った。残酷なことをした気がして、私は目をそらした。

母は予定よりも早く、火曜日の深夜に私を迎えに来た。私が車で母を待っている間、母は祖母と玄関で立ち話をしていた。車のガラス越しには、彼らが何を話しているかはわからなかった。母は浅く祖母の方にお辞儀をしたあと、車のフロントドアに手をかけた。フロントドアから寒い風が入ってくる。死亡診断書、防腐証明書、埋葬許可書、見たこともないような書類を、母は山ほど抱えていた。

どさっと助手席の足元に投げやり、母は長いため息をついた。「お父さんと同じ飛行機に乗って帰ってきたよ。」母は言った。「空港貨物だからって、その分の費用を払わなきゃいけなかったの。おかしな話だよね。」貨物、という言葉が心臓に重くのしかかった。乗客席にのる二人を想像していた自分がばからしく思えた。母の目にはクマができていたが、泣き晴らしたわけではないようだ。少し安心した自分がいた。母は祖母のことについて私に

聞いてきたが、生返事でしか返せなかった。落ち着いたときに、学校に来てくださって、渡辺先生が。いい先生だね。母が言った。私は何も返せなかった。

そのあとの三週間くらい、特に特筆すべき記憶がない。葬式を終えて、火葬をして、父は小さな壺の中に納まった。それだけ。悲しくなかったわけではないと思う。ただ、忙しくて私も母も、泣く余裕がなかったのだ。薄情な親子だ、と誰かが葬式でささやいているのが聞こえた。確かになあ、とうなずくことしかできなかった。

「お父さんがお墓に入るまで、あと何日だっけ？」ふと思い立って、お母さんに聞いた。もう明日よ、と言った。「出かけてくるから、仏壇の水かえといてね。あとビールも。」玄関のドアが開閉する音が響いた。冷蔵庫からビールを取り出して、仏壇の上に置く。タオルでやさしく結露を拭きとる。遺影の中の父は、ぎこちなく笑っていて、父らしくないなあと考えた。

父は帰国した後に飲むビールが大好きだった。キンキンに冷えたもの。スーダンにはビールがないんだ、と父は話していた。帰国するたびに、父の旅について話す時間が、私は大好きだった。父の大きなカメラから映し出される世界は、私には壮大なものに感じた。カラフルな衣装をまとって、歯をむき出しにして笑う子供たち。舗装されていない道路とごちゃごちゃした屋台。食べたこともない食べ物のおい、見たこともない世界に没頭した。右に写真をスライドした時、地面に横たわった、ヘルメットをかぶった男の人が見えた。父はカメラを素早く私の手から取り上げ、無理やり笑って見せた。「これがパパの仕事なんだよ」と父は言った。彼の憂いに覆われた目の奥には、知らない世界が住み着いていたようだった。

6月15日、柔らかな日差しが差し込んだ早朝、電話が鳴った。「お母さん、電話鳴ってるよ。」「そのままにしといて、後で出るから。」キッチンから卵焼きのやわらかい香りが漂う。ジリリという音が私を急かしているようで、耐えられず留守電と書いてあるボタンを押した。03-3580-331。見慣れない番号だった。ランプが点滅し、無機質な女性の声が流れた。「ただいま、電話に出ることができません。ピーという音声が鳴りましたら、ご用件をお伝えください...」ためらいがちに小さく息を吸う音が電話越しに聞こえる。聞きなれない男の人の声だった。外務省から伝えられた父の死は、あまりにも事務的だった。キッチンから重いものが落ちる音がした。キッチンの方へ向かうと、お母さんが膝をついて倒れていた。ぷすぷすと、フライパンから焦げたにおいがする。ガスはつけっぱなしのまま。リビングからこだまする、男の声はざらざらと私たちの体を針でなぞっているようだった。

お墓に入るまでの49日間、魂は家の中をさまようといわれている。私はそうは思わない。きっと父の魂は、天国に行くまでの限られた時間で、今頃世界中を旅しているのだろう。バックパックにぶら下がった、大きなカメラと一緒に。母が家に帰ってきた。二つの大きなレジ袋をテーブルの上において、ゆっくりと椅子に腰かけた。「さおり、」母が手招きをする。「ごめんね、最近かまってあげられなくて。いろいろと忙しかったよね。」母の視線はテーブルへと向かった。山積みになったスーパーのチラシ、小さく折りたたまれた光熱費の明細。塾の宣伝のチラシ。母の目にしわが刻まれているのが分かった。ぼさぼさの髪は乱雑に束ねられていて、息苦しそうにしていた。「今でも電話をかけちゃうの、お父さんに。」私が目を丸くしたことに気づいたようで、母は小さく笑った。「おかしいよね、でも、まだそこにお父さんがいるような気がして。ただ音声しか流れるだけなのはわかっているの。でも期待しちゃうの。お父さんはもしかして、電波のな

いところから、私にかけなおそうとしているんじゃないかって。」テーブルの向こう側から聞こえる嗚咽交じりの声に、私の声は吸い込まれてしまった。時計の針は夜11時を回っていた。

母は、ごめんね、とだけ言い残して、ベッドに向かった。私も軽くシャワーを浴びて、寝室へと向かった。窓から月明かりが差し込んで、ベッドの上に窓の十字の形が投影される。ベッドにぼふっと飛び込んで、目を閉じる。いつもならすぐに寝れるのに、今夜は全く寝付けない。泣いている母の姿が頭をよぎった。私の冷えた足は、ベッドから抜け出して、電話のあるリビングに向かっていた。薄暗い部屋で、ちいさく、しかし鮮明に赤く光るキーパッドが見える。心の中で番号を唱えて、ゆっくりとキーパッドを押す。何回もかけた番号。母と代わりばんこで聞いた彼の声。5, 8, 4...すぐに機械音声に切り替わるだろう。私は恐る恐る電話を取った。ザーと流れた砂嵐の音は、意外にも心地よいものだった。電話をぎゅっと耳に押し当て、目を閉じる。父が海外から電話をかけた時、よく砂嵐とともに、とぎれとぎれの彼の声が聞こえたものだった。「お父さんは砂漠にいるの？」と聞くと、父は電話口で笑っていた。そして決まってこう言った、「すぐ帰ってくるよ」と。

午後11時56分。あと四分で、父は天国に行く。仏壇にあるビールを見やる。

お帰り、お父さん。

